大きなパネルで
聖徳太子の一生を
紹介します。

聖徳太子のさまざまな
エピソードを資料と
ともに紹介します。

この馬の
名前は？

この人は
だれ？

展示期間：令和７年８月２日（土）～１０月１５日（水）
展示場所：斑鳩町立図書館　聖徳太子歴史資料室（2F）

聖徳太子の呼び名について

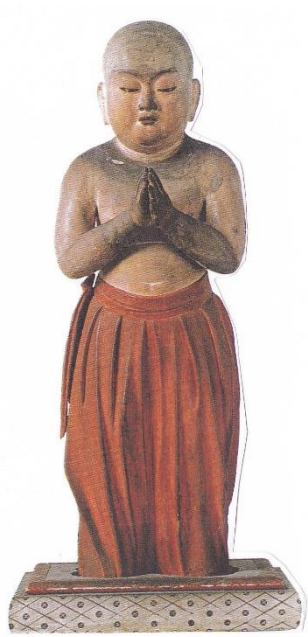
聖徳太子は、「厩戸皇子」のほか、「豊聡耳皇子」「上宮皇子」など、いろいろな呼び名で記録されています。

「豊聡耳」は、人の話をよく理解するという意味で、太子の聡明さを表しています。

「上宮」は、子どものころに太子が住んでいた宮の呼び名からとられました。

私たちがよく知っている「聖徳太子」という名は、のちに、皇子の人柄を偲んでつけられました。

『週刊マンガ日本史 ０２　聖徳太子』
2015 年　朝日新聞出版より



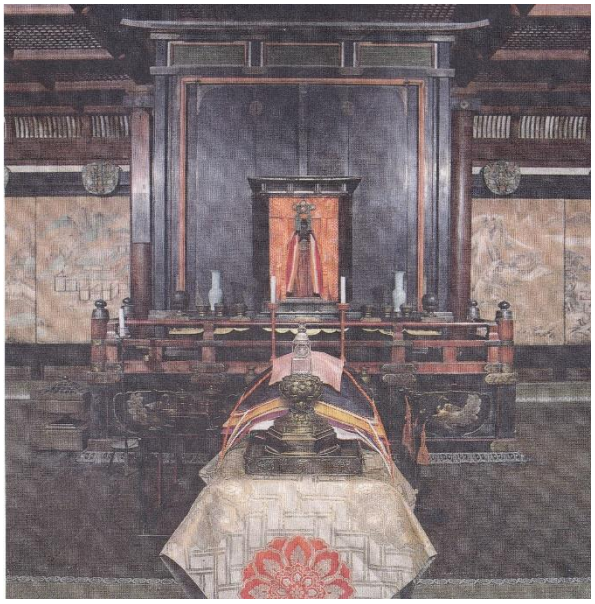
「舎利」と「太子二歳像」について

舎利とは、釈迦の骨のこと。

舎利殿は、東院伽藍（法隆寺境内の東のエリア）の中にあり、

太子二歳像が安置されています。

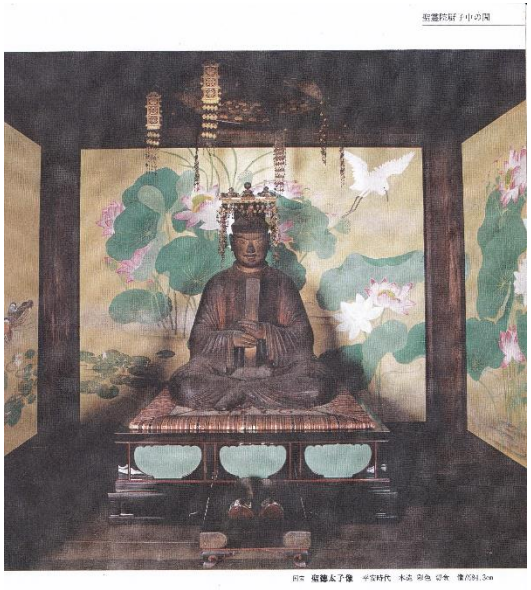
舎利講は、舎利殿で、１月１日～３日まで行われる法要です。
（誰でも自由に見学できます）



「まつぼっくり」について

太子が「好(す)き」と答(こた)えた松の木になる果実(かじつ)のことです。
リスやムササビが食(た)べたあとは、エビフライのような形(かたち)になることもあります。

左から 「法隆寺(ほうりゅうじ)」 「東大寺(とうだいじ)」 「東大寺」 で見つけました。



摂政（せっしょう）とは

天皇（てんのう）の補佐（ほさ）をする人のことです。

写真の聖徳太子（摂政）像は『法隆寺金堂・聖霊院内陣と「四騎獅子狩文錦」』
法隆寺/監修　朝日新聞社　1995 年 より

冠位十二階とは

どのような生まれや身分の役人であっても、功績（国・社会などにとって利益になるようなはたらきをしたこと。てがら）によって高い位につけるようにしようと考えて定められた身分制度です。

大徳	小徳	大仁	小仁	大礼	小礼	大信	小信	大義	小義	大智	小智
濃紫	薄紫	濃青	薄青	濃赤	薄赤	濃黄	薄黄	濃白	薄白	濃黒	薄黒

冠位十二階（奈良県作成。冠の色は諸説ある）

『古代を創った人びと　推古天皇・聖徳太子』
2017年　奈良県/発行　より

十七条憲法 ―要旨―

一に曰く　和を以て貴しとなし、忤ふること無きを宗とせよ。（以下略）
（平和の心を大切にし、むやみに争うことのないようにせよ）

二に曰く　篤く三宝を敬へ。三宝とは、仏・法・僧なり。（以下略）
（仏教の三宝を敬え。三宝とは、仏と仏の説く法則、それを教える僧をいう）

三に曰く　詔を承りては必ず謹め。君をば天とし、臣をば地とす。（以下略）
（天皇の命令には必ず謹んで従え。天皇は天、臣下は地のようなものだから）

四に曰く　群卿百寮、礼を以て本とせよ。それ民を治むるが本、要ず礼にあり。（以下略）
（全ての役人は、礼を重んじよ。民を治める根本は礼にあるからである）

五に曰く　饗を絶ち、欲を棄てて、明に訴訟を弁めよ。（以下略）
（私利私欲を捨てて、公平な訴訟を行え）

六に曰く　悪を懲し、善を勸むるは、古の良き典なり。（以下略）
（悪をこらしめ、善を勧めるのは昔のよい教えである）

七に曰く　人各任あり、掌ること濫れざるべし。（以下略）
（人の能力に応じた適任適材を守れば、政治が乱れることはない）

八に曰く　群卿百寮、早く朝りて晏く退でよ。（以下略）
（全ての役人は、朝早く出勤して、遅く帰るようにせよ）

九に曰く　信は是義の本なり。事毎に信あるべし。（以下略）
（真心は人の道の根本なので、全てに真心をこめよ）

十に曰く　忿を絶ち、瞋を棄てて、人の違ふことを怒らざれ。（以下略）
（人への恨みや怒りを捨て、その人が自分と意見が違うのを怒るな）

十一に曰く　功過を明に察て、賞し罰ふること必ず当てよ。（以下略）
（功績や過ちをきちんと調べて、正しく賞罰を行え）

十二に曰く　国司・国造、百姓に斂らざれ。国に二の君非ず、民に両の主無し。（以下略）
（地方長官は、かってに人民から税金をとってはならない。国の主は一人なのだから）

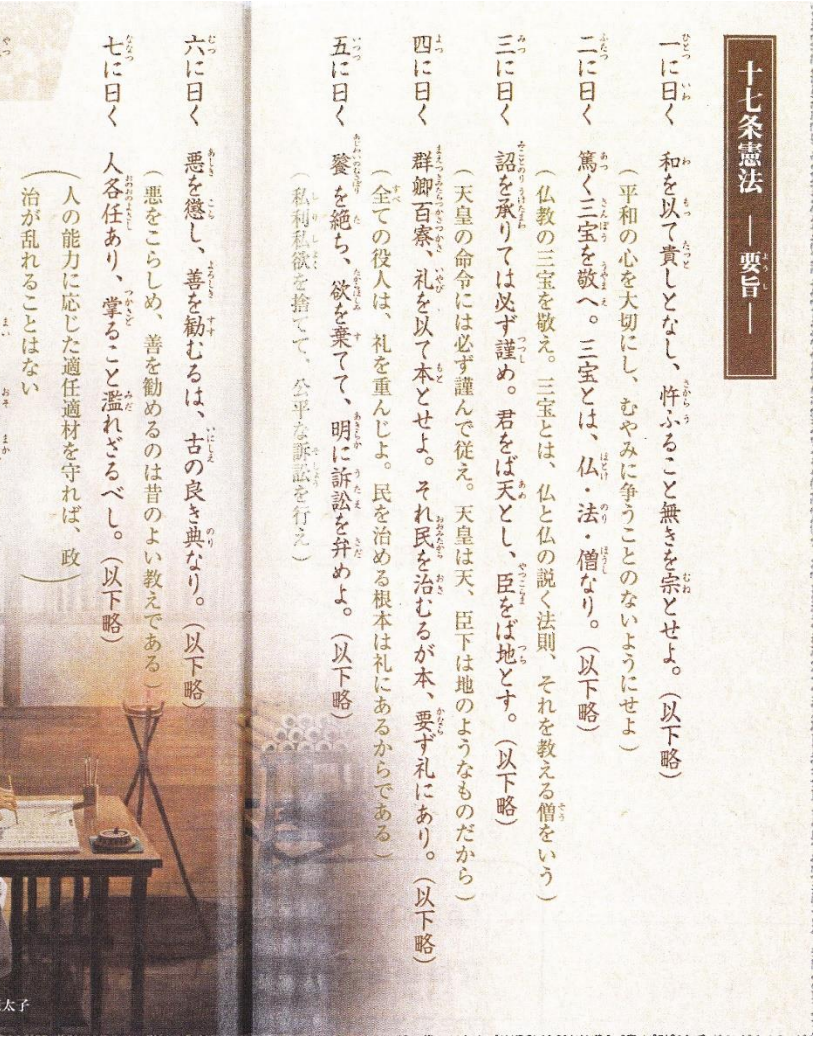
十三に曰く　諸の官に任せる者、同じく職掌を知れ。（以下略）
（各官職にあるものは互いの仕事を知り、欠勤者があっても支障がないようにせよ）

十四に曰く　群臣百寮、嫉み妬むことあるなかれ。（以下略）
（全ての役人は、互いを妬んではならない。妬みあいにはきりがないのだから）

十五に曰く　私を背きて公に向くは、是臣が道なり。（以下略）
（自分の利益でなく、国の利益を考えるのが役人としての務めである）

十六に曰く　民を使ふに時を以てするは、古の良き典なり。（以下略）
（農民を使うときは、仕事の暇な冬に使うのが、昔からのよい習慣だ）

十七に曰く　夫れ事は独り断むべからず。必ず衆と論ふべし。（以下略）
（大事なことは一人で決めず、皆で話しあって決めるべきだ）



後の世のために『三経義疏』を執筆する聖徳太子

十七条憲法

『絵でみる伝記　日本仏教の開祖たち　聖徳太子』

梅田 紀代志／作　PHP 研究所　　2012 年 1 月

聖徳太子は、寺院を建てようと思い、
建立するのに良い場所はないかと探していたところ
葛城で白髭の老人に出会いました。

「ここより東にイカルの集まる斑鳩の里がある。
そこは、仏法興隆の聖地である。
われ守護神となろう」
と告げられます。
この老人こそ龍田明神の化身でした。

聖徳太子はその地に斑鳩宮を造り、
斑鳩寺（法隆寺）を建立しました。
そして、龍田明神の恩に報いるため、龍田神社をまつり、
法隆寺の鎮守としました。

11 龍田神社

三郷町にある龍田大社の祭神で、風の神をまつっている神社です。神社の前を通る道は、奈良から大阪に向かう「奈良街道」と呼ばれ、「龍田市」が開かれて賑わっていました。また、「龍田金剛流」の発祥「能楽発祥地」がたのまたりを拠点に活躍していました。

調子丸古墳

聖徳太子は、各地の様子を知りたいと
丈夫な馬を探します。
甲斐国より献上された黒駒は、天をも翔る神馬で、
舎人の調子麿の世話によってその力は十二分に発揮され
聖徳太子を乗せて富士山を駆け登ったと言われます。

また、日々の政治を行うため、斑鳩と飛鳥の間を
黒駒に乗って往き来しました。

12 駒塚古墳・調子丸古墳

駒塚という名称は聖徳太子の愛馬「黒駒」を葬ったとの伝承に由来しますが、造られたのは聖徳太子の時代よりも250年前の「古墳時代前期」と考えられます。西へ100mほど離れた古墳にも、黒駒を出陣した舎人の名前の「調子丸」が付けられ、人々の聖徳太子への思いが感じられます。

13 太子窪

当時、政治の中心であった飛鳥と斑鳩を結ぶ大和盆地を斜めに通る道で、「斑鳩道」とも呼ばれています。太子はこの道を造り、政務のため斑鳩と飛鳥を往き来していたといわれます。今でも盆地の所々に「太子腰掛石」などの伝承が数多くあります。

駒塚古墳

太子道とは

① 聖徳太子が斑鳩から飛鳥への往復に利用したとされる古道。

伝説では、太子は甲斐（現在の山梨県）の黒駒黒駒にまたがり、調子丸を従えて通ったとされる道。

20km を平均時速10km として約２時間道のりであったと思われます。

『聖徳太子事典』1997 年　石田尚豊/編集　より

② 斑鳩と河内の磯長の叡福寺という、太子のお墓があるお寺を中心としたところへの道。

『太子道 ― 聖徳太子の道を往く』
2002 年　上方史蹟散策の会　より

いかるがのみや 斑鳩宮とは

法隆寺　東院にあった宮。

推古九（601）年に造り始め、推古十三（605）年には斑鳩宮に住んでいたと記されています。

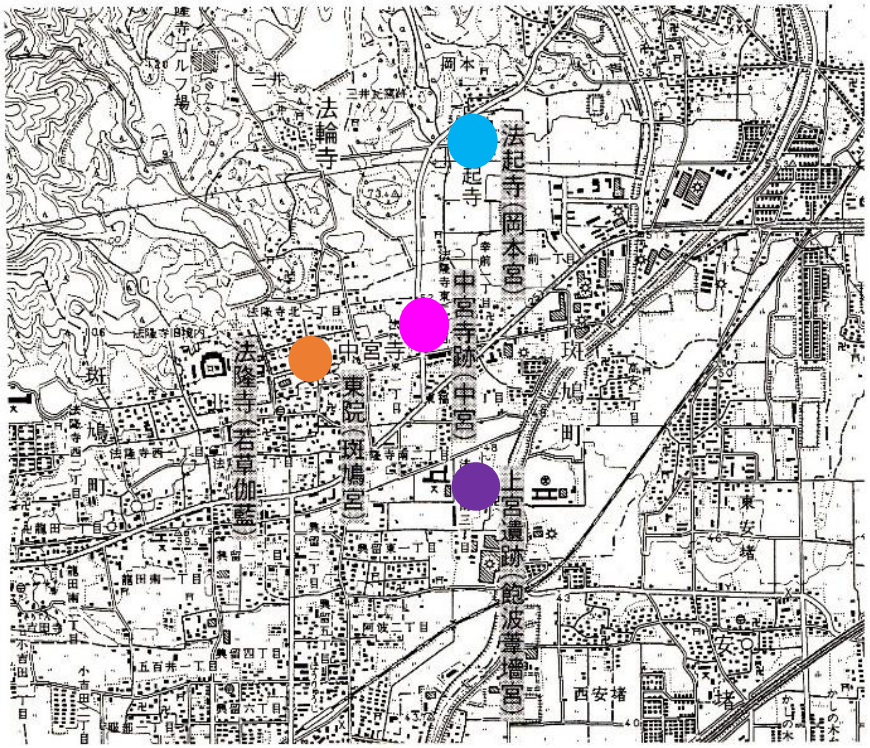


図1　斑鳩にある四つの宮と四つの寺院位置図

飽波葦垣宮とは

上宮遺跡公園の南にある成福寺を中心とした辺りにあったと思われます。

岡本宮とは

岡本宮を改めた寺が、現在の法起寺です。

法起寺の三重塔の露盤というところに文字が記されていて、それには聖徳太子がなくなる前に、息子の山背大兄王に岡本宮を寺にするよう遺言したとされています。

中宮とは

中宮寺跡史跡公園にあった宮。

①聖徳太子の母である穴穂部穂部間人皇女の宮を寺にしたと言われています。それは、中宮＝皇后という考え方からきているようです。

②中宮寺の場所が「斑鳩宮」と「岡本宮」と「飽波葦垣宮」の三つの宮の真ん中にあることから、この場所にある宮が「中宮」と呼ばれたとも言われています。

天寿国繍帳とは

聖徳太子は、推古三十（622）年に亡くなりました。

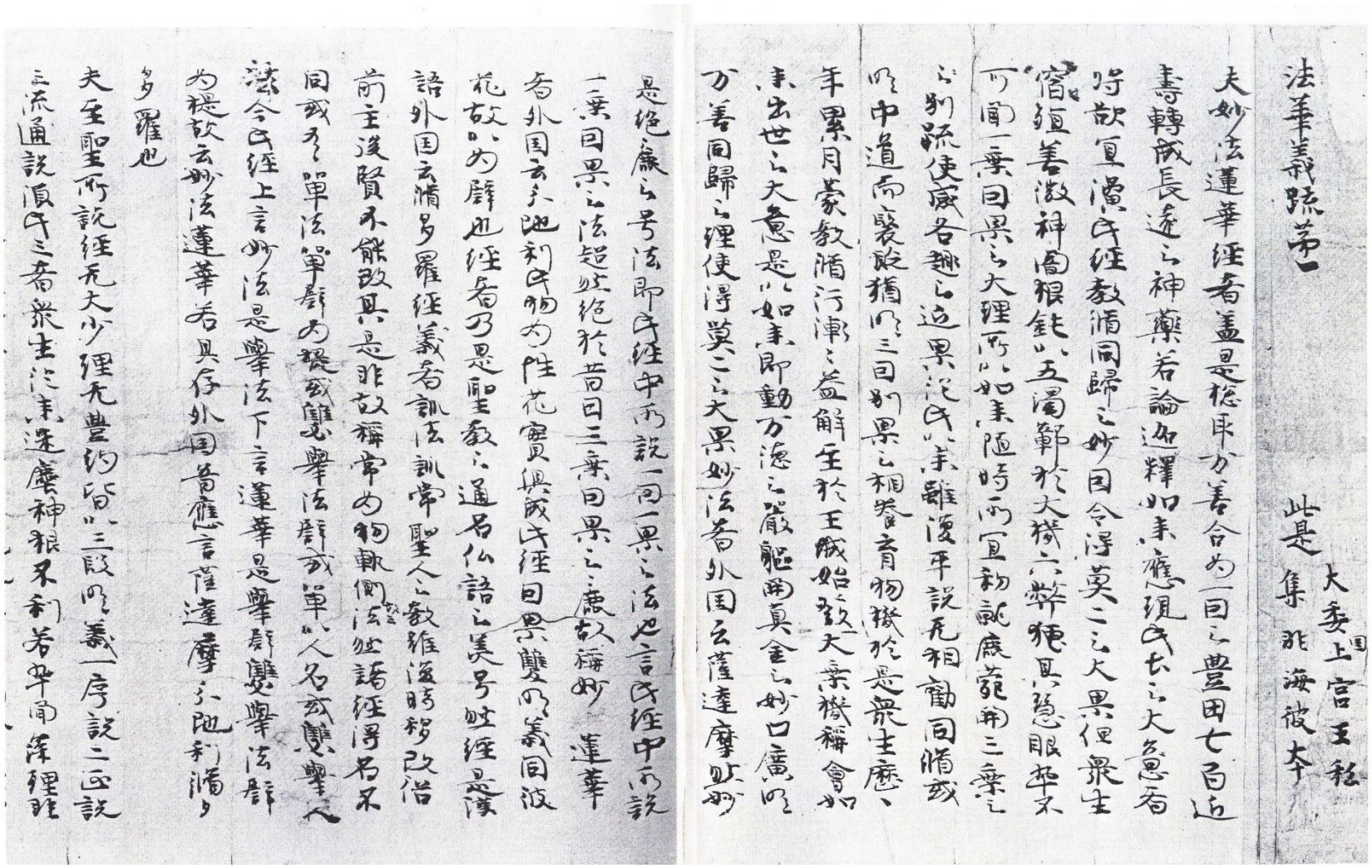
太子の妻の一人の橘大郎女が、天寿国の様子を描きたいと、推古天皇に願い出て造った帳。（部屋の中にたれ下げる布）

『聖徳太子』　渡辺 一夫/編　ポプラ社　2003 年

『国宝・法隆寺展』

内藤 栄（大阪市立美術館館長）/総監修

北海道立近代美術館　２０２２年



法華義疏第一　　大委上宮王私　　此是　集非海彼本

夫妙法蓮華經者蓋是總括衆方善合為一回之豐田七百迴
壽轉成長遠之神藥若論迦釋如來應現化化之大意者
將欲宣演化經教循同歸之妙因令得莫之大果但衆生
宿植善微神智根鈍五濁鄣於大機之弊猶其慈眼平等
所聞一乘回果之大理所以如來隨時而宜初就鹿苑開三乘之
別路使威各趣之迴果從化以來雖復平說充相勸同循或
以中道而褒貶猶以三回別果之相養育物機於是衆生感
年累月蒙教循行漸漸益解至於王城始致大乘機稱會如
來出世之大意是以如來即動方便之嚴軀開真金之妙口廣以
方善同歸之理使得莫之大果妙法者外国云薩達摩以妙
是絶慮之号法即化經中所說一回一果之法也言化經中所說
一乘回果之法超絶於昔日三乘回果之慮故稱妙　蓮華
者外国云分陀利花物為陸花實俱成化經回果雙照義同波
花故以為譬也經者乃是聖教之通名仏語之美号然經是漢
語外国云脩多羅經義者訓法訓常聖人之教雖復時移改偽
前主後賢不能改其是非故稱常也物軌則法然語經得名不
同或云單法單譬為題或雙愍擊法譬或單以人名或雙擊人
法今化經上言妙法是擊法下言蓮華是擊譬雙擊法譬
為題故云妙法蓮華若具存外国音應言薩達摩分陀利脩
多羅也
夫至聖所說經无大少理无豐約皆以三段以義一序說二正說
三流通說頂化三者衆生從未逢慶神根不利若平甫深理雖

『書道藝術』　第11巻

中田　勇次郎／責任編集　中央公論社　1976年10月